

暁の宇品を読んで

中西 卓

宇品は広島市東部沿岸に広がる埋立地で、今は臨海公園とマツダ宇品工場になっているが、太平洋戦争が終わるまでは中国から南太平洋まで日本軍が展開した広域に兵士と軍需物資を送り出す陸軍の一大兵站基地だった。

軍国少年だった私は今でも国民学校1年生の12月8日真珠湾攻撃から始まった華々しい戦果に酔い、先生の引率でシンガポール総攻撃の映画を観に行ったのを憶えている。去る8月末に右の書評を読んで忘れていた戦争をなぞってみたくなった。一通り読んで、陸軍の船舶とは、海軍があるのに？ の疑問が解けた。10/28を前に、この拙稿を開かれた方は適確に紹介されたこの書評を丁寧に読んでいただきたい。

陸軍軍人として異色の経歴の田尻司令官と民間出身の市原技師の人柄、軍閥の争い、事変を収拾できず大戦に突き進んだ軍主導の政治、科学的データを無視したナントカナル風潮を戦争体験なしの著者が聴き取りと防衛研究所の資料調査でよくここまで書けたと感心する。

当時石炭焼きボイラー・レシプロ機関が多かった船のこと、停泊が長引けば船底に蛎殻がついて速力が落ちるので大陸沿岸の要所にドックを手配していたなど。

日清・日露での辛勝が禍して以後の大戦にまで、上海・杭州の上陸作戦から始まって、南方のガダルカナルにいたるまで泥沼に嵌っていった戦記である。満州と支那大陸で経験した兵站戦略が遥か南方海洋に広がる前線にも通用するかのような陸軍中枢の誤った考えがあった。海軍は海

上戦のための艦船を持つことに拘ったので、陸軍は自らの兵士・兵器・兵糧等を現地に運ぶ船舶を用意しなければならなかった。陸軍には生来の造船や操船の専門家が居らず、一方では埠頭がない敵地の沿岸で荷下ろしなど手探りの危険を強いられた。物語の主人公は研究熱心で誠実、同僚や部下の信頼が厚く、必要とあらば南方前線に飛んで目的にかなう船の開発も手掛けた。(上陸用舟艇の前が観音開きでここから戦車や兵士が飛び出すのは田尻氏の考案が始まりである)

ミッドウェー海戦で多くの主力艦船を失って、南方の島への補給を担った輸送船(多くは民間商船を改造)が米潜水艦と航空機に狙われて途中で沈み現地の兵士は飢餓に苦しんだ。補給の帰りに占領地の石炭・油や食糧資源を日本に運ぶ当初の目的が実現しなかったばかりか、惨めな結果になってしまった。

藩閥出身でない主人公は陸士・陸大を出ても出世街道の用兵部門から離れた装備・補給部門を歩み、宇品基地構築から始まった軍人々生の大半が宇品であった。敗色が濃くなったとき、参謀本部の無謀な戦略に異議を唱えたために司令官の職を罷免されたが、戦後同僚がB級戦犯に問われて巣鴨に幽閉されたのに田尻氏はアメリカからの援助物資受け入れを自衛隊が担当する組織で宇品での経験を活かしてリーダーをつとめた。

広島が被爆時異常事態でいち早く動いたのは爆心地から多少とも離れた宇品の兵站司令部だった。それは関東大震災で当時の陸軍末端が中央組織の指示を待たずに行動した功績を知ってたからではないかと著者はいう。

本書によるまでもなく戦争の愚かさを知り、地球・人類が直面する課題の解決は平和が前提であることを改めて認識しなければならない。



著者に
会いたい 『暁の宇品 陸軍船舶司令官たちのヒロシマ』
ノンフィクション作家 堀川 恵子さん (51)



発掘した史実が語る重さ

読ませる技術もさることながら、一行一行を膨大な文献の渉猟と綿密な取材が支えている。著者の作品の常だが、本作も例外ではない。

広島市の宇品には、かつて「暁部隊」と呼ばれた陸軍船舶司令部が置かれ、軍事の要諦である兵站を担った。序章を締める一文が本書の何たるかを端的に伝える。「旧日本軍最大の輸送基地・宇品には、この国の過去と未来が凝縮されていた」

海軍でなく陸軍が船舶輸送を担う意外な経緯は本書に詳しい。知られざる史料を発掘する手腕は健在で、「船舶の神」田尻昌次司令官や技師

の市原健蔵ら魅力的な人物の群像劇が周到にして生き生きと描かれる。戦時、日本は「ナントカナル」で突き進んだ。輸送の死活的重要性を熟知し、先を危ぶむ田尻の声は届かず、直言すれば待っていたのは更迭である。耳に心地よい情報が上に集

まり、さしたる吟味もなく判断が下され、あけく国は破滅に向かう。昔の話と思えないのは、臨場感あふれる筆致のせいばかりではない。

英雄視も見下しもせず、著者はその時代を懸命に生きた無名の軍人たちを忠実によみがえらせている。

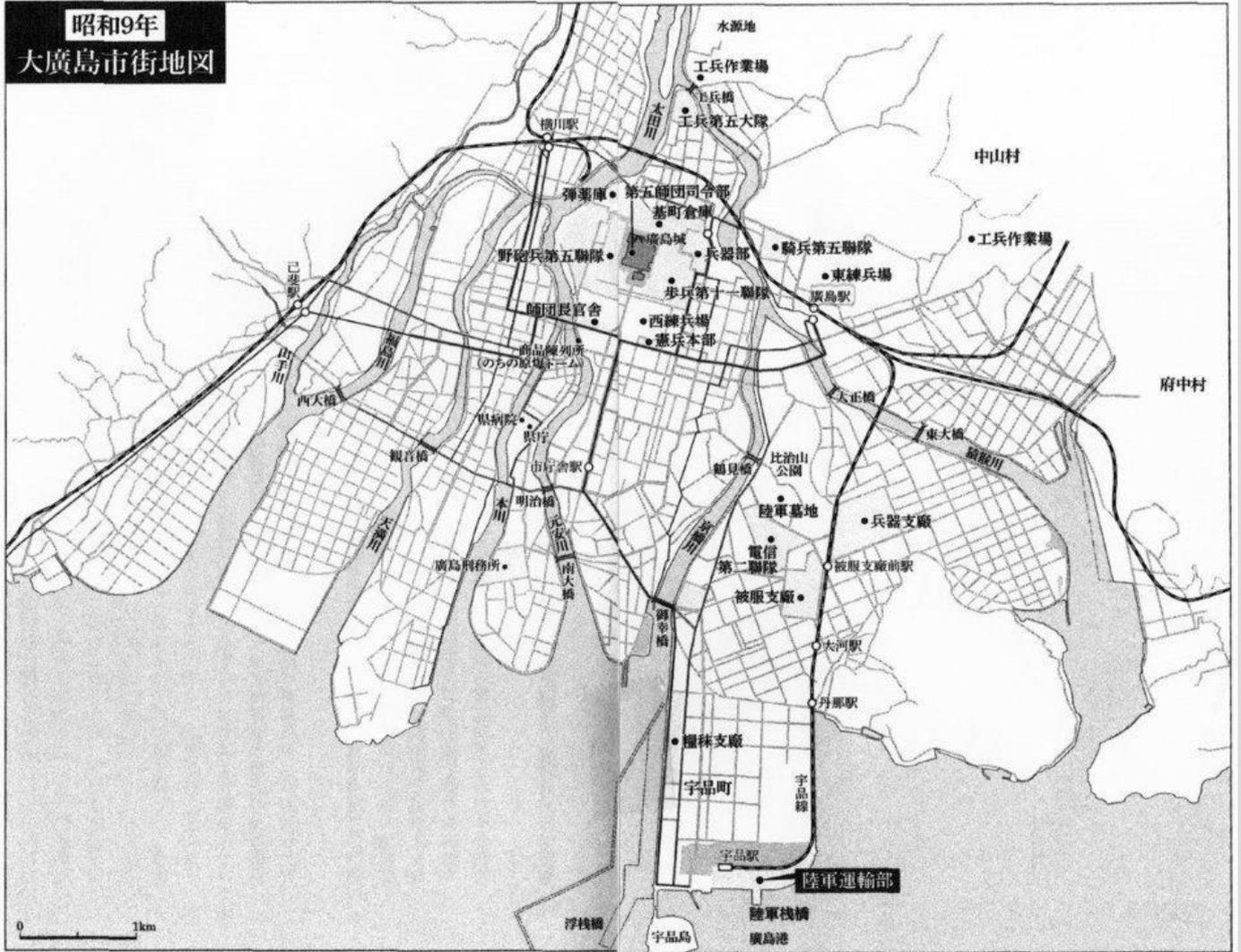
「大きな歴史のダイナミズムに、個々の人生がシンクロした。田尻さんも市原さんも、書き手としての醍醐味を感じさせる存在でした」

宇品の主要任務は特攻に転じた。「小さなベニヤ板の特攻艇で出撃した」若者たち——読みながら胸が塞がれる。初の原爆はなぜ広島に投下されたか。その疑問に始まる物語は巻を措く能わずであると同時に、読後に残されるものがあまりに重い。

ジャーナリストとして30年、本書は集大成の一作となった。節目の年に喪失感やまぬのが、「その頂をすつと目標にできた」立花隆氏の他界だという。著者の関心領域もまた広い。次作は医療をテーマに考えている。(講談社・2090円)

文・福田宏樹 写真は本人提供

昭和9年
大廣島市街地図



※昭和9年廣文館作成地図をもとに再構成し、陸軍運輸部の査閲によって削除されていた「陸軍棧橋」を付記した

家村のメモによると、一行はこの後、台湾の高雄に飛んで現地の船舶部隊を激励した。そこから間もなく海上交通が遮断されてしまおうフリーピンにまで飛ぶ予定だったが、その直前に「捷号作戦」が発令され、佐伯は急遽広島に戻ることになる（正確には捷二号作戦警戒。この一〇日後にアメリカ軍がレイテに上陸する）。

このとき、佐伯司令官が、
——同ジコトニナツタ。

そうつぶやいたとメモには走り書きされている。この短い言葉の意味するところは何であつたらうか。

途絶した南方交通路

時計の針を、一年前に戻す。船舶参謀・篠原優中佐が、ラバウル基地から「転進」することになったのは昭和一八年八月。ソロモン戦線もニューギニア戦線も相次いで崩壊し、ラバウル基地は存在意義を失いかけていた。篠原はほぼ一年ぶりに東京に帰還し、陸軍大学の教官として勤務することになった。いわば高級参謀の戦力温存人事である。

このときラバウル第八方面軍の司令官は、今村均大將。ガ島戦で二度の高速輸送船団が壊滅した後、急遽ジャワ島からラバウルに派遣されたが、もはや傾きかけた流れを変えることはできなかった。篠原が転任の挨拶に行くと、今村は日本軍の兵站を軽視する作戦を批判しながら篠原をこう諭した。

た。

「君が陸大の教官になったなら、戦術教育も対ソ作戦だけでなく、今回の南太平洋作戦の貴重な体験を生かして、海洋・島嶼方面での対米作戦についてよく学生を教育してもらいたい」

現代から見るとわか信じていたいことではあるが、この時点においても陸軍は対ソ戦準備を金科玉条とし、陸大での教育もそれを軸に行われていた。

篠原は、今村軍司令官との約束を守ったようだ。彼が陸大で行った講義の一部をまとめた教書「昭和十九年八月二十日篠原中佐講述 船舶作戦講義録 陸軍大学校」を、防衛研究所の齋藤達志さんが個人的に所蔵していた。

「講義録」は一般的な研究問題の中に、当時は大変な極秘であつたはずのガ島や東部ニューギニアでの船舶作戦を取り上げて問題点を説いている。敗戦を教書に取り上げるのは勇気が要つたのではないか。教書の表紙と該当ページには「軍事極秘」の印鑑がこれでもかと押されていた。

またラバウルに残つた今村司令官も、部下を守り抜くため人事を尽くした。今村はガ島撤退の後、自決を申し出た第一七軍司令官の百武中将に「ガ島の敗退は戦いによるものではなく、飢餓の自滅だつたのです。この飢えはあなたがつつたものですか。そうではありませんまい。……全く、わが軍中央部の過誤によつたものです」と、自決よりガ島戦の顛末を詳しく記録して後世に伝えることこそ肝要だと諭した（「今村均回顧録」）。そして自身はラバウルに對米戦に向けた堅固な要塞を築くのと並行して自ら鋸を振るい、大規模な農作業を展開して食糧を備蓄、自給体制を構築した。アメリカ軍の飛び石作戦でラバウル基地は後に完全に孤立させられ、補給も途絶えるが、陸海軍一〇万もの將兵を島

内に抱えながら敗戦まで一人の餓死者も出さなかった。

しばらく戦線を離れていた篠原が、再び宇品の船舶司令部に配属されて作戦主任参謀となつたのは、前記の講義から四ヵ月後の昭和一九年二月一日のことだ。佐伯司令官の下で働くのは、三年前にサイゴンに進出した戦艦司令官以来。ひとときの栄華を味わつた南國での日々から事態は大きく変わつて来た。

広島に着いたその日の夜から、篠原は自宅に戻ることも許されなかった。凱旋館の二階では参謀たちが缶詰となり、フリーピンへの突入輸送計画に着手していた。本来、昭南の碇泊場司令部が担任する任務だが、もはや数千トンの輸送船は完全に途絶し、増援の船団も次々に撃沈され、決戦直前のレイテ島では前船舶司令官の鈴木宗作率いる第三五軍が飢えかけているとの情報まで寄せられていた。

そこで宇品も全力を挙げて漁船や機帆船などの小型船をかき集め、台湾南部の港へと送り込んだ。そしてルソン島北部へカンフル輸送を始めた。

寄せ集めの船団はトントントンと焼き玉エンジンの音を絶え間なく響かせながら走つた。火夫が総出で缶を焚き、全速を叩き出した。海軍の護衛もないままバシー海峡の荒波に揉まれながらフリーピンを目指した。出航前から「一割帰れば成功」と言われた過酷な作戦に、船員たちは皆、胸にお守りをしのばせた。それしか頼れるものがなかった。しかし、フリーピンに到達できたのはわずかに二隻という惨憺たる有様で、やがてアメリカ軍がリングエン湾から上陸するに及んで台湾からの突入輸送

は空しく取りやめとなつた。

——十分な兵站線が確保できず、増援もできないような地域を決戦場とする作戦は行つてはならない。

篠原はソロモン方面の教訓から陸大でそう講義してきた。しかし現実あまりにかけ離れていた。大本営が命じるセオリーを逸した、ほとんど特攻のような輸送作戦に、延々と船と人員を送り込み続けねばならないのが、まさに宇品の悲劇であつた。

フリーピンにおけるアメリカ軍の優勢がはつきりしたころ、日本の海上交通路はさらに狭まる。潜水艦や飛行機の攻撃をかくぐりながら細々と続けられてきた南方資源地帯と内地とを結ぶ南方交通路も完全に途絶した。

新しい年が明けて昭和二〇年。東京では連日のように空襲がつづき、いよいよ本土決戦の掛け声が現実味を帯びてきた。

二月のある日、宇品港沖に久しぶりに堂々たる大型輸送船が姿を見せた。阿波丸（二万二四九総トン）だ。二年前に日本郵船が完成させたばかりの新造船で、宇品では前例のない特別な機装が施された。船体からは機関砲などのいっさいの兵装を取り除き、全体をあえて目立つよう白色に塗装し直し、甲板と煙突には緑十字のマークが大きく描かれた。

阿波丸は、特別な任務を帯びていた。国際赤十字の仲介によつて、日本の占領下にある香港や昭南に拘留されている連合軍捕虜や市民に対して、赤十字が用意した救援物資を運び届けることになつた

のだ。よって連合軍から往復路の航海における「絶対安全」を保証された。

阿波丸の船長は日本郵船のベテラン、浜田松太郎。浜田船長は宇品沖で出港の準備を終えると、「本船の出出を記念するために」と、篠原ら三人の船舶参謀を船内のサロンに招待した。テーブルは清潔な純白の布に覆われ、ささやかながら酒も置かれていた。談笑するうち、最近はずつかり見なくなったビールステッキが運ばれてきて、篠原を驚かせた。

小さな宴が静かに果てると、船長はおもむろに立ち上がり船内を案内したいと言いつ出した。篠原ら参謀たちを従えて、船長は黙って下へ下へと降りていく。下り着いた船底には、船体の両舷内側に沿わせるように黄色の梱包を施された固まりがずらり設置されていた。すべて爆弾だった。

参謀たちをふり返った船長の顔からは、先ほどまでの和やかな笑顔は消え失せていた。そして思いつめたような面持ちでこう言った。

「もし、この阿波丸が不幸にしてアメリカ艦船に捕らえられ、アメリカ本土に連行されるようなことになりましたら、私はこの爆弾に点火して自爆自沈いたします」

一同、息を呑んで聞き入った。船長は続ける。

「暗号書類は、このような袋に入れて、鍾をつけて、いざというときには海底深く沈めるつもりです」

連合軍が保証する航路の「絶対安全」に、船長は決して安心していなかった。

「十分に気を付けて行って下さい」

「しっかりと頼みます」

悲壮な船長の覚悟に、それ以上の送る言葉は見当たらなかった。

翌日、阿波丸は宇品を出港、途中でいくつか寄港しながら一路、昭南へと向かった。往路は平穏のうち過ぎ、無事に目的地に到着。国際赤十字の救護物資を届けるという所期の任務を果たした。

昭南には、日本への帰国を待ち望む者たちが大勢いた。入港した阿波丸の噂は瞬く間に広がる。この船なら連合軍から安全が保証されているから無事に帰国できる。

復路には政府大東亜省の役人たちが、沈没船から救命された船員たち、商社マンら二〇〇〇人余が競うようにして乗船。さらに軍部の強い要求により、浜田船長はやむなく重油やガソリンなどの軍需物資をめいっぱい積み込んだ。

三月二八日、満載吃水線をすっしり水面下に沈めた阿波丸は、再び日本へ向かって出発する。ところが四日後の夜、船は南シナ海でぶつりと消息を断つた。

宇品の司令部ではアメリカ軍に拿捕されたのではとの噂が飛び交った。篠原は、出航前の船長の話を思い出し、よもやと思った。間もなく阿波丸はアメリカ軍の潜水艦によって撃沈され、一人を除いて全員が船と運命をともにしたことが判明した。

阿波丸を撃沈したアメリカ人艦長は後に軍法会議にかけられたが、「不注意」として戒告処分を受けるだけに終わる。重大な戦時国際法違反は、それ以上追及されることはなかった。

戦場で失われる命はどんどん軽くなっていく。三月には硫黄島守備隊が玉砕、アメリカの機動部隊が沖縄に上陸を始める。

小豆島や江田島で①の乗船訓練を受けた特戦隊の若者たちはフィリピン、沖縄の戦線へと送り込ま

れ、小さなベニヤ板の特攻艇で出撃した。アメリカ軍にとっては想定外の奇襲攻撃で、歩兵上陸艇CIT二隻が撃沈され、他にも数隻が損傷を受けたと伝わる。しかし、即座に海上に機雷をばらまく②対策が取られると同時に、魚雷艇による「特攻艇狩り」が始まった。以降、ほとんどの③が目的を達することなく撃沈され、若い命が次々に暗い海底へと沈められていった。

④は出撃した二八八人のうち、七割の一六三六人が戦死。この中には海洋で遭難後、フィリピンに上陸して餓死した若者も少なくない。飛行機による特攻は、国民の戦意高揚のため広く報道され讚えられたが、陸軍船舶司令部の海上挺進隊の動向は極秘任務とされ、報道されることはいつさいなかった。そのため⑤の死闘は戦後長く封印されることとなる。

敵に戦法がばれてしまった以上、⑥は成果を伴わない作戦となり果てた。それでも後方の江田島には新たに一〇代の若者たち二〇〇〇人が全国各地から集められ、特攻訓練は続いてゆく。

四月、フィリピンのアメリカ軍は、日本本土の主要港封鎖を目的とする本格的な攻撃に着手する。彼らはこれを「帆船作戦」と呼んだ。

まず呉や佐世保、下関海峡の上空からB29が機雷を投下して周辺の海上を封鎖。五月に入ると東京・名古屋・大阪・神戸の各港も封鎖され、とうとう下関海峡から阪神地区への物資輸送が断られた。投下された機雷は一万二〇〇〇発以上にのぼり、掃海作業はとてつもない難題となっていた。日本近海は船の墓場となっていく。沈没した船のラストや煙突が海面からあちこち突き出す様は、まるで一面の林のように見えた。

船舶の交通路が徐々に狭まる六月、大本営から宇品に対して、本当に久しぶりの作戦が下命された。作戦名は「特攻朝輸送」。きたる本土決戦に備えて、満州や朝鮮半島から軍需品や食糧を西日本の山陰地区へ逆輸送、七月下旬までに輸送総量一〇〇万トンを目指せよとの指令である。

日本海側には、まだわずかながら航行の自由が残されていた。全国の各都市が連日のように激しい空襲に晒される中でも、日本海側の町は比較的被害が少ない。

久々に宇品が動いた。配下に生き残った船舶はわずかに一四〇隻(三二〇万総トン)。このうち大型船は吉備津丸、熊野丸、めるぼるん丸、和浦丸、有馬山丸、日昌丸の六隻だけだったが、船舶司令部は全船を日本海にまわして輸送に着手した。釜山、羅津、元山、馬山の港から、日本海側一六カ所の港にいつせいに物資を運ぶ作戦である。

佐伯司令官を筆頭に、篠原ら船舶参謀がそれぞれ港にはりついて指揮をとった。管戦部では予備船員を確保し、兵器部では舟艇の整備、各種資材、燃料、水、船用品、浮標器材などの整備に走り、修理部、経理部、法務部も現地に駆けつけて総員体制で作業にかかった。

実際のところ、この時期には在満支の兵力はアメリカの八個師団に過ぎず、弾薬に至っては近代式の大戦であれば一回分にも満たないと、現地を視察した参謀総長の梅津美治郎は上奏している(高木惣吉「日記と情報」)。

山陰への物資揚陸にあたっては、港ではない単なる海岸線まで使用された。十分な荷役の行える港湾施設はなく、作業はすべて人力で行わなくてはならない。しかし、若い労働力は根こそぎ戦争にとられてしまっている。結局、空爆と機雷をかくぐりながら必死に運ばれたなげなしの物資も、多く

が波打ち際に放置された。なんとか鉄道沿線まで運んだ物資も、各駅の倉庫に停滞したままとなった。

七月中旬の暑い盛り、篠原は船舶兵器部の莊司武夫中佐(三八期)ひとりを連れて列車に乗り込み、山口県内の港を視察しに出かけた。

広島を遠く離れた山陰の田舎町には、どこかのんびりとした空気が流れていた。茂る青葉は目に沁み入るように青く、細い農道の土は白く炎天に輝いている。

仙崎(長門市)の小さな埠頭には、人々が供出した金属類が小山のように積まれていた。宣徳火鉢、床の飾り物、薄端(金属製の花器)、蚊帳の吊り、金色に輝く仏像が惜しげもなく炎天の海風に晒されている。それすらも、もはや運ぶ人手がない。

続いて訪れた秋港で見た風景を、篠原はこんな風に綴っている。

食糧事情は極めて悪く、国民は粗衣粗食にあまんじて、勝つまでは頑張りましょうと励ましあっていた。釜山から機帆船に積み込んできた多量の大豆が萩の港に陸揚げされていた。揚陸された大豆袋は港からさらに停車場へと、荷車やトラックに積まれて運搬されている。

大豆袋は、ところどころ破れて穴が開いたのか、途中の路上に大豆の粒がばらばらりと五粒、十粒とこぼれ落ちていく。その荷車の後を追って、ざるやどんぶりを持った女や子どもが付いて歩く。そして、こぼれた大豆粒を丹念に拾い集めている。どんぶり一杯にたまった大豆を抱えた女や

子どもの嬉しそうな顔。これが昭和二〇年七月ころの特攻朝輸送の姿であった。これが日本全国、津々浦々の姿であった。私は、この有り様を目撃して目頭のあつくなるのを覚えた。

篠原は前年の秋、東京青山の陸大で教官をしているときのことを思い出した。夕暮れどき、下宿のある四谷の原町へと歩いて帰る途中、ひとりの老婆が道路を這うようにして血眼になって何かを探していた。

「おばあさん、どうしたのですか」

篠原が気軽に声をかけると、老婆は見知らぬ軍人を食い入るように見上げ、絞り出すように言った。

「今日、ようやくじゃがいもが配給になりました。たった二個です。それを確かに買い物かごに入れたのです。かごを腰の後ろに持って帰っている間に、底に穴でもあったか一個、落ちてしまいました。今こうして探しているところです」

篠原は老婆といっしょになって道路に這いつくばり、じゃがいもを探した。しばらくすると、少し先の小溝の中に転がっているのを見つけた。それを手渡すと、老婆は黙って頭を下げ、じゃがいもを大事そうに握りしめて帰って行った。じゃがいも一つを必死に探していた老婆の姿も、今、目の前で零れ落ちる大豆の粒を拾って歩く人々の姿も、せつばつまった日本そのものであるように思えた。

一億火の玉、本土決戦へ――。

掛け声は大きい。しかし汽車の窓から目についた本土決戦の演習訓練をしている部隊には、三八歩

兵銃を持つている兵隊がひとりも見当たらない。手に手に竹やりを持って肉弾攻撃の訓練に汗を流している。もはや兵隊に武器すらいきわたらないのだった。

足りないのは船だけではなかった。武器も、食糧も、すべてが足りない。船舶を失った小さな島国は、床から起き上がることもできぬ病人同様であった。

そばに座る莊司中佐も、遠くを見やうと黙ったまま。広島への帰路、二人は車窓にわかるがわる現れる村々の竹やり訓練と真夏の夕暮れを眺めながら互いに口を緘し、一言も発さなかった。

そうして、宇品は昭和二〇年八月を迎える。